



高橋教夫先生を偲んで



「高橋教夫先生を偲ぶ」

山形大学名誉教授

野 堀 嘉 裕

(昭和55年農学研究科修了)

高橋教夫先生は、昭和22年12月20日滋賀県に生まれました。昭和41年3月31日に滋賀県立膳所高等学校を卒業。昭和45年3月京都府立大学農学部林学科を卒業。昭和51年3月北海道大学大学院農学研究科博士課程林学専攻を修了されました。

その後、昭和53年4月農林省林業試験場に採用された後、昭和60年4月に山形大学助教授農

学部に奉職され、平成4年4月同大教授農学部に昇任、平成24年3月で定年退職されました。

一方、大学の管理運営においては、山形大学農学部生物環境学科長、山形大学附属図書館農学分館長および、農学部学務委員会委員長を歴任され、大学の発展に多大なる貢献をされました。

学生時代も、社会人になってからも、先生からは多くのことを学ばせていただきました。

先生の体調がすぐれないということを耳にしたのは平成23年の暮れ頃でした。そして、昨年11月18日、神田リエ先生からの電話で訃報を知りました。11月下旬、先生宅に弔問させていただき、懐かしい奥様の笑顔と、ランドサットの衛星写真や山々をバックの先生の写真などに久しぶりに触れ、改めて林学に人生を捧げられた先生の姿勢に感嘆しました。

今は、先生の近くにいながら、日々の雑事に追われ疎遠になっていたこと、それが悔やまれます。穏やかな笑顔の教夫先生、ありがとうございました。



徒步での芦沢(演習林)

これらの功績により平成25年4月には山形大学名誉教授の称号を与えられました。

この間、高橋先生は森林経理学、森林計画学ならびに地域生態学に関する研究を通じ、多数の学生の研究指導に当たり、延べ150名を超える学生を学士と修士号の取得に導きました。その中には林野庁や各県庁の林務行政に携わる優秀な人材が多数活躍しています。研究においては森林林業の長期研究の重要性に早くから注目し、山形大学農学部の演習林内や庄内地域の国有林内に貴重な研究調査地を設置され、20年以上の継続したデータが収集されています。これらのデータは、森林経理学、森林計画学ならびに地域生態学の発展に大きな貢献を果たしています。一方、森林経理学および森林計画学の向上に関する研究では、空中写真判読による林相把握、また炭素固定に關わる森林の肺存量把握にも欠くことのできない分析ツールである衛星画像のデータ解析やGISを取り入れた土地利用に関わる解析を早い時代から始めました。高橋先生の研究室には運用可能なラジコンヘリが3台用意され、空中からの近接撮影がいつでもできるよう上名川演習林の森林GIS構築を想定していたものでした。

高橋先生の学外での活動としては、森林計画学会の和文誌編集委員長、その後同学会会长をはじめ、東北森林学会会長、また日本雪水学会東北支部理事などを歴任されました。さらに行政関係においては、また、東北森林管理局国有林野管理審議会委員、東北森林管理局事業評価技術検討会委員、東北森林管理局技術開発委員会委員など

を務めるなど地域社会への貢献にも努め、地域の振興発展において活躍されました。

私が高橋先生に初めてお目にかかるのは北海道大学の大学院時代で、森林計画学会のシンポジウムの時でした。温厚であると同時に大変面白い方だと記憶しています。その後10年を経て高橋先生の研究室の助教授として呼んでいただきましたが、真面目さは全く変わるところが多く、いつも大学運営等に真摯に取り組んでいた姿を思いました。酒宴の席ではラジコンヘリのことをいつも楽しそうに話しておられました。現場主義の高橋先生は野外調査が大好きで、櫛引の国有林や演習林やチハバのブナ林調査を楽しみにされていました。ブナ林内での高橋

先生の笑顔は研究室ご出身の皆さんに記憶のことと思います。

高橋先生は退職直前に病に伏され、その後闘病生活に入りました。病床ではおそらくドローンを飛ばすことを夢見ていたことでしょう。闘病の末、令和元年11月に高橋先生は天国へ旅立ちましたが、天国でも最新式のドローンを片手に持つて「君子たる、便利になると信じつ、心かね」と語っているに違いありません。高橋先生の夢が天国で羽ばたいていると信じつ、心からご冥福をお祈りいたします。

卒論用試料のブナの木を採



1996年7月24日: 櫛引ブナ林調査

「透き通るような笑顔」

伊藤 信
(昭和62林学科卒)

「ブナ二次林の競合に関する考察」これが34年前の私の卒業論文だった。樹幹解析をするためのPCプログラムは当時「ボル」を想定していました。

そして、パワードは「norio t」。そうです、教夫先生の名前です。

先生が国林業試験場(現森林総合研究所)から山形大学に赴任されたのが、私が3年の時でしたから、先生にとっては我々が2年目の出来の悪い研究室の学生となつたのです。

当时、先生のお住まいは、啓明寮の奥にあつた古い教員官舎でした。日々、酔って遅くにおじやと同時に大変面白い方だ

と記憶しています。その後10年を経て高橋先生の研究室の助教授として呼んでいただきましたが、真面目さは全く変わるところが多く、いつも大学運営等に真摯に取り組んでいた姿を思いました。酒宴の席ではラジコンヘリのことをいつも楽し

うに話しておられました。現場主義の高橋先生は野外調査が大好きで、櫛引の国有林や演習林やチハバのブナ林調査を楽しみにされていました。ブナ林内での高橋

ことは言うまでもありません。

卒業後、山形県に就職した後のことです。初日に私がワゴンジープのギアを折ってしまい、ゼミの皆から芦沢へどうやつて行くんだと攻め立てられた時、先生は、「歩いて行けばいいじゃないか。」

いつもの笑顔で関西弁を散りばめながらおつしやつてくれまし

た。なんて素朴で明解なんだろう。

改めて、先生の心の広さ、清らかさを感じたのです。もちろん、皆さんはいつまでも酒の肴にされたことを思い出します。

改めて、先生には何度も救われました。林道工事を担当し、公共事

業の再評価委員会で検討案件

になった時、当時委員であった先

生の雄弁な説明に他の委員も納得して事業継続が認められたり、

「やまとがた緑県民会議」の議長

でした。

先生が國林業試験場(現森林総合研究所)から山形大学に

勤めたことです。さらに情報伝達

です。

先生の笑顔は研究室ご出身の皆さんに記憶のことと思います。

高橋先生は退職直前に病に伏され、その後闘病生活に入りました。病床ではおそらくドローンを飛ばすことを夢見ていたことでしょう。闘病の末、令和元年11月に高橋先生は天国へ旅立ちましたが、天国でも最新式のドローンを片手に持つて「君子たる、便利になると信じつ、心かね」と語っているに違いありません。高橋先生の夢が天国で羽ばたいていると信じつ、心からご冥福をお祈りいたします。



「菅原賢治さんを偲んで」

鶴窓会会長
(昭和45年農学科卒)

菅原賢治さんを 偲んで

6代目鶴窓会会長
菅原賢治さんを偲んで

を早めるために、できれば代議員、幹事はインターネットでメールが可能な会員を選出して頂くようにし、事務の効率化を図るべきとの意見でした。さらには平成17年から鶴窓会のホームページを開設し、情報提供を迅速に行うことができるようになりました。

おかげさまで、今年のコロナ禍でもインターネットでの代議員会の議決を行うことができました。

おかげさまで、今年のコロナ禍でもインターネットでの代議員会の議決を行なうことができました。

平成16年には国立大学法人化となりこともあり、同窓会と農学部の連携強化を図るために、平成19年から学外アパートを借りて鶴窓会事務所を学内の農学部会館に移転して頂きました。これにより事務作業が格段と効率化し、農学部に対する支援や貢献のあり方についても役員の議論が活発化しました。

平成16年には農学部会館に移転して頂きました。これにより事務作業が格段と効率化し、農学部に対する支援や貢献のあり方についても役員の議論が活発化しました。

平成16年から16年度までは副会長、平成17年から18年度は会長を務められました。在任中は平成19年度の農学部創立60周年記念事業について、精力的に企画検討して頂きました。

特筆すべき事項は、従来の庄内地域の各学科卒業生の幹事によることで、山形農業経済学研究室を卒業後、山形県農業協同組合共済連合会に勤務し平成8年に退職しております。

平成11年から16年度までは副会長、平成17年から18年度は会長を務められました。在任中は平成19年度の農学部創立60周年記念事業について、精力的に企画検討して頂きました。

特筆すべき事項は、従来の庄内地域の各学科卒業生の幹事によることで、山形農業経済学研究室を卒業後、山形県農業協同組合共済連合会に勤務し平成8年に退職しております。

その代議員、幹事による総会の開催へと大改革するための協議をし始めたことです。さらに情報伝達

です。

鶴窓会への多大なる御尽力に感謝申し上げ、心からご冥福をお祈り申し上げます。

先生の笑顔は研究室ご出身の皆さんに記憶のことと思います。

高橋先生は退職直前に病に

伏され、その後闘病生活に入りました。病床ではおそらくドローンを飛ばすことを夢見ていたことでしょう。闘病の末、令和元年11月に高橋先生は天国へ旅立ちましたが、天国でも最新式のドローンを片手に持つて「君子たる、便利になると信じつ、心かね」と語っているに違いありません。高橋先生の夢が天国で羽ばたいていると信じつ、心からご冥福をお祈りいたします。

先生の笑顔は研究室ご出身の皆さんに記憶のことと思います。

高橋先生は退職直前に病に

伏され、その後闘病生活に入りました。病床ではおそらくドローンを飛ばすことを夢見ていたことでしょう。闘病の末、令和元年11月に高橋先生は天国へ旅立ちましたが、天国でも最新式のドローンを片手に持つて「君子た